

PETレター発行によせて

日立総合病院PETセンター長兼副院長 平井信二



2004年4月のPET検査稼働開始後より昨年末までに、検診1,173件、臨床2,800件(内紹介1,255件)の総数3,973件のPET検査を施行致しました。この間に、検診利用では数多くのがんを発見し、また臨床利用では原発や転移のがん病巣の発見診断に役立って来たと自負しておりますが、一方でPET検査の限界にも目が向けられるようになって来ました。これらの経験を通してPET検査に関する最新の正しい知識を皆さまに提供するお手伝いをさせてもらいたいと思い、今回このPETレターを発行することにしましたのでご参考にして頂ければ幸いです。また、当院のPET検査で使用するブドウ糖薬剤(FDG)は自施設内で作製するため、検査の枠にはまだまだ余裕がありますので、なお一層のご利用をお願い致します。

PET検査担当医師より

PETセンター副センター長兼放射線診療科主任医師 中島光太郎



FDG-PET検査が保険適応となって3年近くが経過し、広く臨床で使用されるようになってきました。それに伴って、悪性腫瘍の診療において、精度を高める有益な診断手段であることが確認されてくると同時に、所見解釈の注意点、その能力を最大限に引き出すための方策などがわかってきております。この「PETレター」では、最近の知見のご紹介と、日立総合病院で経験した症例の提示を通じて、PET検査の情報をご紹介することにより、臨床でご利用の際のヒントになればと願っております。

PET検査の保険適応について・・・現在15疾患に認められています。

A. 悪性腫瘍としては、

脳腫瘍	頭頸部がん	乳がん	肺がん	大腸がん
膵がん	悪性リンパ腫	転移性肝がん	悪性黒色腫	原発不明がん
食道がん	子宮がん	卵巣がん	の13種類に認められています。	

B. また、悪性腫瘍の他に、

虚血性心疾患 手術を行う際のでんかん病巣の検出 が認められています。

- * このうち、虚血性心疾患の際のご利用に関しては、前処置が煩雑であるため、ルーチンには検査をお受け致しておりません。当院の循環器科を通じてご相談ください。
- * でんかん病巣の検出に関しては、必ず「手術を前提とした」検査である、ということが必要であることにご注意ください。



がん検診におけるPET検査の利用

PET検査の特徴のひとつに、全身を一度に観察できるという利点があります。

この特徴を最大限に利用しているのが、日本で盛んに行われているPETがん検診です。

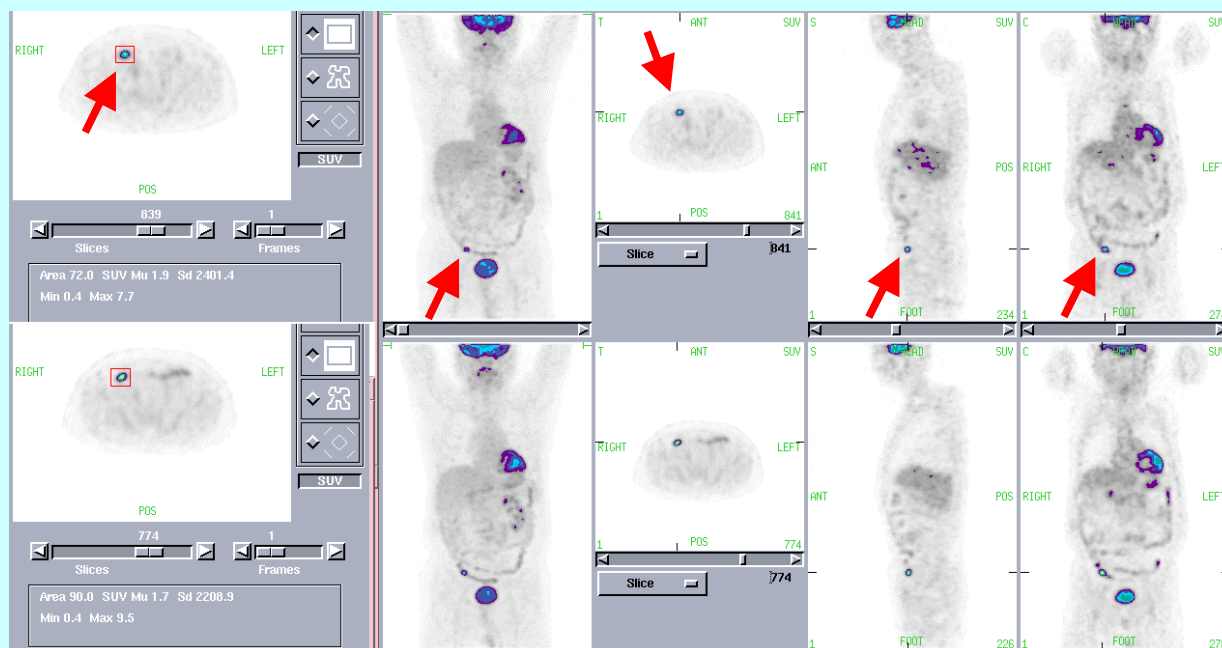
当院では、2004年4月から2005年12月までに、延べ876人のPET検診を行い、19例20癌を発見しております。発見率は2.2%で、PETを含んだ「がん検診」での平均的な発見率が1.6%ほどであるといわれている中で、非常によい成績を出しています。

一方で、PET検診では発見できなかった例が現在4例あり、PET検査が決して万能ではないことを示しています。

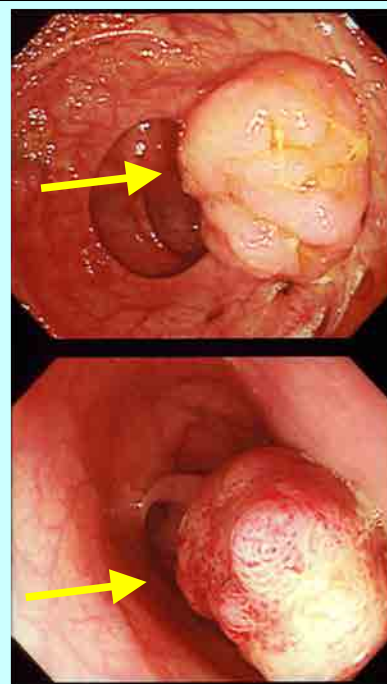
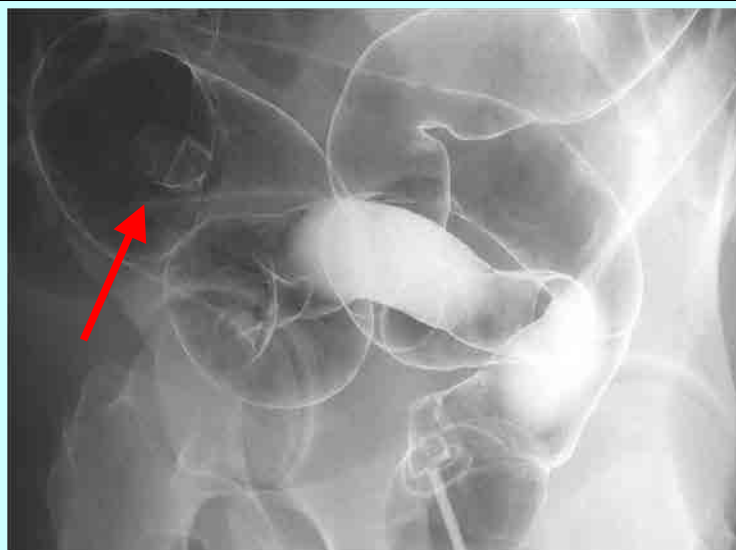
PETで発見の難しい、高分化肺がん、胃がん、乳がん、腎がん、前立腺がん、子宮がん、などに関しては、CT、バリウム検査、内視鏡、マンモグラフィ、超音波検査、子宮細胞診などを組み合わせる必要があります。

PET検診発見症例

右下腹部に高度の集積異常増加を認めた症例です。



上段がFDG投与後60分の画像で、下段が120分の画像です。
左から、SUVmax値、MIP画像(最大値を投影した画像)、軸位断面、矢状断面、冠状断面です。



注腸検査と大腸内視鏡検査で、22mm径の山田福富型のポリープが発見され内視鏡的に切除されました。病理診断は、高分化腺癌(深達度m)でした。

編集後記

今回PETレターを発行させていただくことになりました。

PET検査は、いくつかの施設が共同で利用することが保険点数上も想定されています。当院のPET検査も多くの医療機関の皆様にご利用いただくことを期待しております。

今回のPETレターも気軽に検査のご依頼をいただけるようにするため、目に見える情報公開を目指しております。不定期の発行になるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

掲載ご希望の内容や、検査をご利用いただきPETが有効であった症例など、情報をお寄せいただければ幸いです。

問合せ先: 日立総合病院PETセンタ 鈴木達也 0294-23-1111(代) E-mail: tatsuya.suzuki@lbabyo.hitachi.co.jp